安積の歴史シリーズ

第32回　近代　近世の用水と安積疏水(2)

柳田 和久（やなぎだ　かずひさ）
郡山市文化財保護審議会
委員

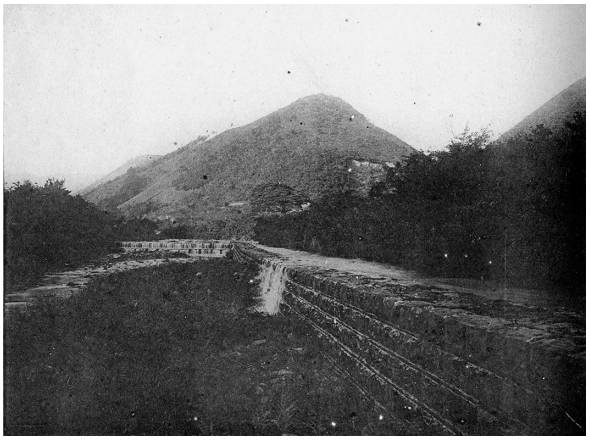
安積疏水幹線水路と玉川堰

安積疏水は、猪苗代湖の水を安積郡に流すため、水門を猪苗代湖畔の上戸（旧山潟村）に設け、田子沼を経て、沼上峠から五百川に落下させた。沼上峠を越すためにトンネルを掘り、一気に五百川に落した。

五百川の水と合流させて熱海（現・ホテル華の湯の裏側）まで流し玉川堰で取水した。玉川堰で分水し、安子島・長橋・河内・多田野・山口・富岡と奥羽山脈の裾を下し、鍋山を経て笹川まで流した。玉川堰から富岡までの水路を、安積疏水幹線水路と呼んでいる。

玉川堰は、江戸時代には横川堰と呼ばれ、横川村に取水するための堰であったが、安積疏水にとって要地にあたることから、玉川堰を安積疏水の取入口とした。そのため、玉川堰のやや下流に分水口を設けて横川村に流し、横川村が水に困らないようにした。

第１図　沼上震天瀑（「安積疏水志」より転載）



第２図　玉川堰（「安積疏水志」より転載）

明治９年（1876）に横川村と青木葉村が合併し、玉川村と改称したため玉川堰と改めた[1]。堰の構造は、丸太を横にしただけの簡単なもので、そのため洪水の度に流され、その都度造り替えてきたが、安積疏水の取入口となったことから石造の堰に改造した[1]。

安積郡の村々に水を流すため、玉川堰から富岡村までの間に７カ所に分水口を設けた。その水路を第１分水路・第２分水路・第３分水路・第４分水路・第５分水路・第６分水路・第７分水路と呼んでいる。

『安積疏水志』の口絵に「安積疏水灌漑全図」が収録されている。安積疏水の幹線水路と７つの分水路を描いたものである。第３図は「安積疏水灌漑全図」を基に、水路を鮮明にするため道路を消し修正したものである。

第３図　安積疏水灌漑全図（「安積疏水志」より転載）

第１分水路

第１分水路は、安子島・長橋・上伊豆島・下伊豆島・堀ノ内・前田沢・早稲原・日和田・高倉・梅沢・八丁目の11カ村の古田と新田を潤す水路である。古田は江戸時代からの水田で、新田とは対面原を開墾する予定の水田である。

そのため、分水口を安子島村字北吉野に設け、対面原（たいめんはら）に流し、堀ノ内・早稲原（わせはら）を経て、日和田で５条に分け、高倉・梅沢・八丁目まで流した。

11カ村の古田と新田の面積は第１表のとおりで、古田は約620町歩、新田は150町歩である[2]。そのうち安積疏水は古田の半分310町歩と、対面原の新田150町歩を潤し、古田の残り半分310町は従来の水を使用する計画であった。

安積疏水は新田だけでなく古田にも水を入れており、しかも新田より古田の方が面積が多いのである。

第３図に、第１分水路は安子島村で分水し、堀ノ内・早稲原を流れ、対面原を経て、日和田・八丁目・梅沢まで流れているのが描かれている。水路は日和田で数条に分かれているが、高倉への水路は省略されている。

第１表　第１分水路と灌漑反別

村　名	古　田 反　別	古田・新田 反　別	備　　考
安子島村	107町１畝９歩	古田 620町歩 対面原 新田 150町歩	従来の水 古田 310町歩 安積疏水 古田 310町歩 新田 150町歩
長橋村	19町３反３畝歩		
下伊豆島村	44町３反３畝歩		
上伊豆島村	29町４反３畝３歩		
八丁目村	33町４反５畝20歩		
梅沢村	25町５反１畝22歩		
前田沢村	43町１反９畝３歩		
堀ノ内村	84町３反３畝歩		
早稲原村	55町４反８畝８歩		
日和田村	91町３反４畝９歩		
高倉村	85町５反３畝３歩		
小　計	618町９反５畝９歩 (618町９反５畝17歩)		

前号（本誌№482）第31回に掲載の第１図と本稿第３図を比較するとわかるように、第１分水路は、途中で安子島堰の水路に繋（つな）いでおり、安子島堰の水路を利用しているのである。安子島堰は明暦２年（1656）に築かれた堰である[3]。

第２分水路

第２分水路は、長橋・上伊豆島・下伊豆島・八山田・福原・富田・日和田の７カ村の古田と、広谷原の開墾新田を潤す水路である。

そのため、分水口を長橋村字一ノ関に設けた。一ノ関で分水した水を一旦藤田川（ふじたがわ）に落し、上伊豆島村の下伊豆堰で取水し、広谷原（こうやはら）にて２方向に分け、一方は八山田（やつやまだ）・福原に、一方は富田・久保田に流している。

７カ村の古田と新田の面積は第２表のとおりである[4]。７カ村の古田は約400町歩、新田は200町歩で、そのうち安積疏水は古田の半分200町歩と新田200町歩を潤し、残り半分の古田200町歩は従来の水を使用する計画である。

第３図に、安積疏水幹線水路から藤田川に分水し、再び藤田川から取水し広谷原を流れ、八山田・福原に流れる水路と、富田・久保田に流れる水路が描かれている。取水している場所は上伊豆島村の下伊豆堰である。下伊豆堰の近くに鹿島神

第２表　第２分水路と灌漑反別

村　名	古　田 反　別	古田・新田 反　別	備　　考
日和田村	38町９反２畝24歩	古田 400町歩 広谷原 新田 200町歩	従来の水 古田 200町歩 安積疏水 古田 200町歩 新田 200町歩
長橋村	19町３反３畝17歩		
下伊豆島村	９町４反７畝８歩		
上伊豆島村	24町２反５畝３歩		
八ツ山田村	49町３反３畝歩		
福原村	126町１反６畝６歩		
富田村	131町８反４畝20歩		
小　計	399町３反２畝28歩 (399町３反２畝18歩)		

社が祀られていることから鹿島堰とも呼ばれている。下伊豆堰は、丸太を横にしただけの簡単な堰であったが、第２分水路として使用することから、石造の堰に造り直したのである[5]。

前号（本誌№482）第31回に掲載の第１図と本稿第３図を比較するとわかるように、第２分水路は藤田川に一旦落し、下伊豆堰（鹿島堰）で再び取水し、下伊豆堰の水路を流しているのである。第２分水路は下伊豆堰と水路を利用しているのである。下伊豆堰は万治３年（1660）に築かれた堰である[6]。

第３分水路

第３分水路は、河内（こうず）・片平・富田・郡山・久保田の５カ村の古田344町歩を潤す水路である。

分水口を河内村字地引（じびき）に設け、同村字中谷地まで流し、同所で逢瀬川へ落す水路と、片平に引く水路の２条に分けた。逢瀬川に落とした水は下流の堰で再び取水し、富田・久保田・郡山で用いている。また一方は片平村に引いている[7]。第３図には片平村に流している水路が描かれている。

貞享４年（1687）の「河内村明細帳」に、逢瀬川に設けられている堰が記載されている。一ノ堰・猫神堰・午房沢堰・藤内打堰・笊内（ざるうち）堰である。一ノ堰・猫神堰・午房沢堰・藤内打堰は河内村の水田を潤し、笊内堰は片平村の水田を潤す堰である。笊内堰は河内村字笊内前に設置されている。河内村の土地を借用しているため、片平村では毎年河内村に地代を払っている[8]。

笊内堰とその水路は、遅くても貞享４年までには築かれている。第３分水路は、逢瀬川と笊内堰の水路を利用しているのである。

第４分水路

第４分水路は、分水口を多田野村字桐ノ木下に設け、多田野・大槻村の古田と庚壇原（こうだんばら）の開墾新田に流す水路である。第３図に桐ノ木下で塚野堰の水路に分水し、多田野村字中ノ平で３条に分かれ、庚壇原に流れる水路、壇経川（だんきょうかわ）（大槻川）と合流する水路、葉山池（はやまいけ）に注いでいる水路が描かれている[9]。

塚野堰は、逢瀬川から取水するため多田野村字塚野に設けられた堰である（高篠山森林公園の南下付近）。塚野堰で分水した水は、堀口・別所の水田を潤し、多田野村の集落を流し壇経川と合流している。塚野堰が何時造られたかは不明であるが江戸時代には設けられている[10]。第４分水路は塚野堰の水路を利用している。

第５分水路

第５分水路は、多田野・大槻・桑野・郡山・小原田・日出山村の古田や大蔵坦原（だいぞうだんばら）の開墾新田を潤し[11]、また上ノ池（五十鈴湖）・下ノ池（元豊田浄水場）・荒池・酒蓋池・葉ノ木沢池（現在は宅地）・五百渕（名倉池）に注ぐ水路である。そのため、分水口を多田野村字十文字に設け、壇経川と南川に落している。壇経川は、多田野・大槻村を潤しながら開成沼に注ぎ、明治９年に立村した桑野村の水田を潤している。

南川は、第３図のように大槻の静御前堂辺りで

第４図　第５分水路

二条に分かれ、一方は上ノ池・下ノ池・荒池に注ぐ水路、一方は五百渕に入れながら、日出山・小原田村に流れる水路が描かれている。

第５分水路は、壇経川・南川を使用しているのである。

第６分水路

第６分水路は、山口・大谷・駒屋・八幡・荒井・成田・日出山の古田を潤す水路である[12]。そのため、分水口を山口村字大窪に設け、山口・大谷・駒屋村を流し、川田村字藤ノ木で笹原川に落している。

第３図に、安積疏水幹線水路から分水し、山口・大谷・駒屋村を流れ、川田村で笠原川に合流しているのが描かれている。

深田池（現　深田調整池）は宝暦７年（1757）に造られ、山口・大谷・駒屋村の水田を潤していたことは、前号（本誌№482）第31回に記載したとおりで、深田池や水路は遅くとも宝暦７年には築かれている[13]。第６分水路は、深田池から山口・大谷・駒屋に流れる水路を利用していると考えられる。

また、第３図に描かれてないが、川田村で笹原川に落とした水は、成田村の成田堰（島川原堰）で再び取水し、成田・荒井・日出山村の水田を潤している。成田堰が築かれた年代は不明であるが、江戸時代にはすでに築かれている[14]。また、荒井猫田遺跡の発掘調査により成田堰の堀跡から中世の木簡が出土しているので[15]、中世に築かれた可能性のある堰である。

第６分水路は、深田池から山口・大谷・駒屋に流れる水路と、成田堰とその水路を利用している。

第７分水路

第７分水路は、三穂田町の富岡村字山寺より笹川村までの水路で、幹線水路をそのまま第７分水路とし、途中で岩瀬郡仁井田村へ流している。

第７分水路は富岡・鍋山・野田・川田・笹川・岩瀬郡仁井田の古田や牛庭原の開墾新田171町歩を潤す水路である[16]。

このように、安積疏水は五百川・藤田川・逢瀬川・壇経川・南川・笹原川に流し、それらの川に設けられている堰で再び取水するなど、安積郡を流れる河川を十分に活用している。また、第１分水路は安子島堰の水路、第２分水路は藤田川や下伊豆堰とその水路、第３分水路は逢瀬川や笊内堰の水路、第４分水路は塚野堰の水路、第５分水路は壇経川・南川、第６分水路は深田池から駒屋までの水路と笹原川に設けられた成田堰を使用しており、江戸時代から使われていた堰や水路を効率的に利用しているのである。

註

(1)　『安積疏水志』巻之一
(2)　『安積疏水志』巻之一・巻之二、福島県庁文書 F2711
(3)　『郡山市史』８
(4)　註２
(5)　註１
(6)　註３
(7)　註２
(8)　註３
(9)　註２
(10)　二本松市発行『翻刻　相生集　上』、『郡山史市』８
(11)　註２
(12)　註２
(13)　郡山市歴史資料館所蔵山岡家文書水利30・38・39
(14)　『郡山市史』８、郡山市歴史資料館所蔵今泉家文書水利64・65・66
(15)　『郡山南拠点土地区画整理事業関連荒井猫田遺跡（Ⅱ区）－第17次発掘調査報告－』、郡山市遺跡ガイドブック『埋もれていた中世のまち　荒井猫田遺跡』は、木簡が出土した川を作内川としているが、成田堰（島川原堰）の水路の誤りである。
(16)　註２